

# 批評及び紹介

モルゲンステイルネ氏

「パミール方語の研究」

榎 一 雄

G. Morgensterne: Indo-Iranian Frontier

Languages. Vol. II Iranian Pamir Languages.

(Yidgha-Munji, Sanglechhi-Ishkashmi and Wa-

khi.) Institut for Sammenlignende Kultur-

forskning. Series B. pp. XI+564+66. With

many photographs and a leaf of Map. Oslo,

1938.

十九世紀に入つて、主として英・露二國の政治的競  
争から、西トルキスタン、殊にパミール高原の探査が

モルゲンステイルネ氏「パミール方語の研究」

相次いで行はれた結果、それ以前數世紀の間全く暗  
黒に閉ざされてゐたこの地方の事情が大いに明かにな  
り、やがて調査の手が東トルキスタンに延べられる  
に及んで、二十世紀の學界の面目を一新せしめる幾  
多の大発見が行はれたことは、事新しく説くまでも  
な<sup>63</sup>。嘗つては絹街道の南道の要衝として東西の文  
獻にその記載を絶たなかつた Sairkol, Wakhan 一  
帯の地方の地理・住民・言語等が、更めて詳細に調査  
研究せられたのは、全く右のやうな趨勢に基くもの  
である。殊にパミール高地に住するイラン系統の民  
族の言語が Indo-Iranian 語の古形を傳へたもので  
あつて、同時にそれが東トルキスタン出土の諸文書  
の解讀に少なからぬ貢獻をなす事實が明かにせられた  
のは、東部の發見と西部の調査とが、相依り相助け

て、始めて完璧を期し得るといふ興味ある事實を示したものである。

言ふまでもなく、Sarikol は Kashgar, Yarkand 二河の上流域が形作つた南北に細長い溪谷であり、その西の Wakhan は Oxus 河の主流をなす Wakhan 河の溪谷であるが、これらの地方の住民の多くは通常 Ghalcha 人と呼ばれるアーリアン系統の人類である。この人種の分布は單に右の二地方のみならず、Oxus 上流諸川の溪谷、即ち Ishkashim (Wakhan 河の下流である Pandj 河の流域) 地方からその北方 Shughnan, Roshan, Yazgulum に及び、更に Wardadj 河の上流、Ishkashim の西南に當る Zebak, Sanglich, Munjan, Lutkoh 地方に至つてゐる<sup>(6)</sup> Shughnan, Roshan, Yazgulum は、夫々 Wakhan 河と略々平行して、Badakhsan 西部の山側を北流する Oxus 本流に注ぐ Gundj, Barlang, Yazgulum 河の溪谷の名稱である。

これらの地方の住民が一種獨特の言語を用ひてゐることは、玄奘・慧超等が早くも注意してゐる所であるが、十九世紀に至つて調査が行はれ始めた時にも、同様の事實が大いに人々の注意を引いたために諸種の旅行記、調査録の中には、必ずその語彙の二、三を紹介してゐるのが常である。しかし、何れも極めて断片的な報告であるから、その言語の性質を推知することすら望めなかつた。これを最初に系統づけ組織づけて發表したのは、英國の R. B. Shaw 氏である。氏は一八七六年から一八七七年にかけて自らの調査其の他に基き「Ghalcha 語に就て」と題する論文の中に、主として Wakhi (Wakhan 地方の言語) Shughni (Shughnan 地方語) Sarikoli (Sarikol 地方語) の三方語について、その音韻・文法・語彙を詳述し、更にこれらと系統を同じくする Sanglich (Sanglich 地方語) Munjani (Munjan 地方語) の語彙を附載して比較研究の資に供し、所謂 Ghalcha 語がア

ーリアン諸語、殊に Dard 語やパルミア語や Zanti 語と密接な關係を有することを論じ、Ghalcha 人は太古アーリアン族の移動に際し、パミール高地に止つたもの、遺裔であらうと示唆した。<sup>(4)</sup>この提説は、直ちに學界に異常な反響を捲起し、何人もこの言語の更に十分な研究を切望したのである。

Shaw 氏の研究の公にせられてより二年、獨の W. Tomaschek 教授は Sh. 氏の研究を基礎とし、専ら Ghalcha 語の語彙を他の印歐諸語と廣く比較し、就中 Munjami がその語形に於て最も古く、Avesta 經の言語に最も近似してゐることを主張した。<sup>(5)</sup>Munjami の東方、Hindu Kush 山脈を隔てた Lutkoh 地方に行はれ、同じく Ghalcha 語のグループに屬する Ydgha 語の研究を最初に行つたのも、この教授であつた。<sup>(6)</sup>一方、かゝる學界の要望に應じて、直接現地に就しての探訪が開始せられた。即ち露の D. L. Ivanov、佛の G. Capus 等は、相次いで Shughni, Wa-

zhi に就いての貴重な資料を齎し歸つた。殊に前者は K. G. Salemann 氏に依つて詳細な研究が行はれた結果、Shughni 語には、男女性による語法の區別が存する新事實が闡明せられて、學界の注目を惹いたのである。<sup>(7)</sup>この間にあつて、これらの諸研究を綜合整理し、Pamir-Dialekte の名のもとに、その音韻論・語態論(Morphologie)を確然と基礎づけ、將來の研究への指針を與へたのは、有名な W. Geiger である。<sup>(8)</sup>

先づかやうにして、Ghalcha 語の性質も大體明かにせられ、それが印歐語の極めて古い形に屬し、比較言語學上忽せにすべからざる貴重な資料であることが知られたが、なほこの語の重要性を増加したのは、先にも一言した如く、それが東トルキスタン出土文書の解讀に非常な貢獻をしたことである。これを最初に指摘したのは A. F. R. Hoernle 氏で、氏は一九〇〇—一年スタイン氏が和蘭の北方 Dandan-uliq

から將來した Brahmī 文字の文書の解讀に當つて、後々 Nordarisch, Khotanese などと呼ばれる所謂 Saka 語が、Ghalcha 語に最も近似せることに氣付いたのである。Turfan 出土の Sogd 語文書——F. W. K. Müller 氏等によつて初め Palhavi Dialekto と漠然呼ばれてゐた——の釋讀にも重要な役割を果したのは餘りにもよく知られてゐる。Ghalcha 語の調査研究は、こゝに於て、一層廣範圍に一層綿密に行はれるやうになり、その成果は續々と學界に提供せられることとなつた。即ち、先づ G. A. Grierson 氏は、その編著にかゝる “Linguistic Survey of India Vol. X. (pp. 455-549, Calcutta, 1920)” の中の特に一章を設け、Sarikoli, Wakhi, Shughni の三方語は専ら Shaw 氏に基つて約説するほか、從來研究の十分でなかつた Ishkashimi, 並びにそれと一類の Zebaki, Sanglichi, Yidgha, Munjani に就つては、新得の資料によつて之を詳説し、別に “Iskash-

imi, Zebaki, and Yazghlami (Prize Publication Fund of R. A. S. Vol. V. Lond. 1920, pp. 128)” と題する專論を公にして、その蘊蓄を傾けた。Yazghlami 語と云ふのは、Yazghulann 地方に行はれ、Shughni 語に酷似した言語であるが、この地方が險阻で入り難かつたために、從來全く調査の圏外に置かれてゐたのである。氏の Yz. 語研究は、一九一五年親しくこの地に赴いたスタイン氏探訪の語彙を中心になされたものであつた。これより先、佛の新銳 R. Gauthiot 氏は、露の I. I. Zarnbin 氏と相携へて Yazghulann に至り、調査する所があつた。Gauthiot 氏が Zarafshan 河の上游 Yagnob 地方 (Sarmarkand の東方) に於て Sogd 語の最後の發達の段階を示してゐると認められる Yagnobi 語の研究に従事したのは、この前年(一九一三年)のことであつたが、この第二回の中亞入りに於ては、偶々勃發した歐洲大戰に参加すべく直ちに歸國したため、Yz.

語の調査以外に及び得なかつたやうである。(27) 因みに、Yagnobi 語は従來 Ghaleha 語の中に含められてゐたが、現今では之から除外するのが普通である。なほ G. 氏には第一回の探訪に當り Samakand に在つて行つた Waki, Munjami 兩語の研究がある。(28) 又 Zaratshan の更に上流 Karatgin 地方、並びに Yazghulam の北 Darwas 地方 (Wantsch 河の流域) の Ghaleha 人の言語は「早へ A. Semenov 氏によつて調査せられた。(29)

Stein, Gauthiot 氏以後、P. ミール方語の探訪は一時中絶してゐたが、一九二八年、ソ聯邦學士院主催のもとに行はれた大規模なアラール、P. ミール踏査は、その言語に就いては豊富な成果を齎した。即ち、その第一は同學士院から出刊せられた調査報告 Pamirskaja Ekspeditsija 1928g. 第六冊 (Trudy Ekspeditsii Vypusk VI. Lingvistika. Leningrad. 1930. pp. VIII+108) に收められた I. I. Zarnbin 氏の

Oroskaski 語 (Roshan 溪谷の東方に接續する Bar-tang 河上流域の言語) の研究であり、その第二は「同じくこの調査に加つた獨の W. Lentz 氏に依つてなされた Shugni 語の研究である」(Pamir-Dialekte. 1. Materialen zur Kenntnis der Shugni-Gruppe. Götingen, 1933)。<sup>(30)</sup> Lz. 氏は引續ち Yazghulam, Ishkashmi, Waki 諸語に就いても、探訪の結果を發表する豫定であると聞いてゐる。而して「一方これらの諸氏とは別に、顯著なる成績を擧げたのは、ノールウ・イの言語學者 Georg Morgenstierne 氏である。氏は一九二四年、一九二九年の兩回に互り、アフガニスタンの東部、印度西北地方の言語調査に派遣せられた。氏の最も主要なる目的は、Pamir Dialekte と呼ばれるイラン系統の言語と Indo-Aryan 系統の言語の相接するこれらの地方に於て、この兩系統の言語の分布交渉の状態を調査することに在つた。氏の調査の大意は、Report on a Linguistic Mission

to Afghanistan (Oslo, 1926. pp. 96) 及び Rep. on a Ling. Miss. to North-Western India (Oslo, 1932 pp. 79) と題する小冊子に記録せられてゐるが、第一回は専ら Kabul に在つてアフガニスタンに於ける言語分布の状況を視察し、殊に Kabul 河の上流域に用ひられるイラン語系統の Ormuzi, Parachi 兩語について詳細な研究を行つた。これが氏の所謂の "Indo-Iranian Frontier Languages" の第一冊をなすものである。<sup>(82)</sup> 第二回は主として Chitral に在つて、その附近の調査を行ひ、Wakhan, Ishkashim, Munjan 等からこの町に來る Ghatcha 人に就いて、夫々の言語を調査した。この結果がこのに紹介しようとする勞作であつて、Indo-Iranian Frontier Languages の第二冊を成す Yidgha-Munji, Sanglechi-Ishkashmi 並びに Wakti 語の研究である。氏に従へば、本書の題名の示す通り Yidgha 語は Munji 語と、Sanglechi 語は Ishkashm 語と、夫々全く同一の語群と

見らるべきであつて、従前の如く分離して考へるべきものではなからのである。調査終了の後、本書出版に至るまで正に九年。モ氏用力の勤、想見すべきものがある。

本書は大別して五部に分れる。即ち、先づ本書全體に對する解説に始まり、次に各論として、Yidgha-Munji (pp. 3-282) (Sanglechi-Ishkashmi (pp. 285-427), Wakti (pp. 431-558) の諸語を詳究し、最後に English-Iranian Index (pp. 66) を附載する。各論は何れも先づ序論に於てその語の性質・特徴を始め、その行はれてゐる地方に關する地文・人文的説明を施し、その語の採訪に當つての諸手續(調査した人々の性別・年齢・職業・閩歴其他)を述べ、次にその Phonetic system, Historical Phonology, Morphology に就いて能ふる限り研究の調査を詳説し、更に Texts and Translations の章を設けて氏の採訪に係る諸種の説話のトランスクリプションとその譯とを掲

げ、最後に各々の語彙を附してゐる。この中、氏の最も力を用ひたのは、Historical Phonology と Vocabulary とである。前者は各語の Phonology の發展を可能なる限り歴史的に考察して、これら諸語の共通の本源たるべき a Pamir Language の本姿を髣髴せしめんと異常なる努力を傾注したものであり、後者は從來のあらゆる研究、旅行記等に採録せられた限りの語彙に、氏自身訪得の語彙を附加し、更にその該博なる蘊蓄を傾けて印歐諸語との比較研究を施したものであつて、學界を益する所最も多いであらう。本書の序文の中に、氏は次の如く言つてゐる。

パミール諸語の語彙は、非常に複雑な性質を有してゐるが、その中で最も興味あるのは、それら各語の中にイラン原語 (Genuine Iranian Words) が保存せられてゐることである。これは古代イラン語の語彙に關する知識が限られてゐる我々にとつては、特に重要な意味を有つもので

ある。幸ひにも、パミール諸語、特に Wakhi 語は、他の何れのイラン語又は Indo-Aryan 語に於ても知られてゐない多くの古く Indo-European 語を保存してゐる。中而してパミール諸語の語彙は單にイラン語研究に於て貴重であるのみではない。アヴェスタ經の言語が一體どの地方に行はれた言語であるかを研究するのは、現代のイラン諸方語とこの種の語彙とを詳密に比較する以外に方法はないと信ぜられるが、自分の見る所では大部分「パミール方語がその主要部分をなす」東方イラン語であるやうに考へられる。Yidgha-Munji 語では太陽を Mira と云ふが、これは av. Mitra に溯るべきものである。Sanglechi 語で太陽を sō ornōzd が anc. pra. Ahura-Mazdah に他ならぬことも注意すべきであらう (p. XIV)。

Bactria が紀元以前相當に古い時代から Zoroaster

教の中心地として榮えてゐたこと、<sup>(19)</sup>アヴェスタ經に見える地名が總べて東方イランに限られてゐること等<sup>(20)</sup>を考慮すれば、この經の製作せられたのが東方イランに於てであらうことは容易に想像せられるけれども、<sup>(21)</sup>モ氏のこの度の研究は、この想像を或る程度決定的に裏附けるものと思はれる。

又、氏の調査によつて、従來明白に知られなかつた Munjan, Lutkoh 地方の地理、村落の名稱、住民の生活狀況等が可成り詳しく知られたことも、記して置かなければなるまい。<sup>(分)</sup>本書の内容の詳細は悉く省略しなければならぬが、以上述べた所によつても、その價值の一斑が知られるであらう。

要するに、氏は従來の諸研究を集大成すると共に、最も科學的な方法を用ひて従來なほ調査不十分であつた氏の所謂 Indo-Iranian Linguistic Frontier の言語に就いて、精到なる考察を施したのであつて、東方イラン語の研究を一步前進せしめた功績は没すべ

くもない。將來、氏の如き有爲の學者が續出して、なほ不明の部分多き中央亞細亞の諸方語の調査報告が、陸續と吾人の前に提供せられんことは、何人も希望する所であらう。

本書の姉妹篇 Ormurj, Parachi 語の研究は未だ閱讀の機を得なから、第二冊を一覽したつて、バミール方語研究史のほんの概略<sup>(22)</sup>を回顧し、併せてこの方面の研究に於ける本書の價值多しことを紹介しようとした。筆者の不學なる、その所期の一半でも果して居れば幸ひである。(十四・五・十七)

#### 補註

- (一) バミールに關する知識の發達や、その近世に於ける探險史の概略に就くは J. B. Paquet, Le Pamir. Paris, 1876, A. Schultze, Lautskundliche Forschungen im Pamir. Hamburg, 1916. SS. 9-21. S. Hadim, Southern Tibet. Vol. VIII. pp. 3-88. ヌネンツェン「歐洲殊に亞細亞に於ける東洋學研究史」(昭和十二)外務省譯(第十八、十九章)。其他 G. Gutzon, Russia in Central Asia. London, 1899. Appendix; Pamirskoja Ekspeditsija 1928g.



Vypn. Lening. 1930 pp. 57-58 と著せられたる書に  
 中 中 西 語 語 彙 編 21-24 J. N. I. Bakor, A History  
 of Geographical Discovery and Exploration. Lond.  
 1931. pp. 281-301 著者註。

(3) 東 ア フ リ カ の 探 險 史 25 卷 57 頁 著 者 第 百 四 號 註  
 中 中 西 語 語 彙 編 21-24 J. N. I. Bakor, A History  
 of Geographical Discovery and Exploration. Lond.  
 1931. pp. 281-301 著者註。

(3) Ghaleha へ せ ー じ ー じ ー Mounhain Tadjik 25 卷 57 頁 註  
 中 中 西 語 語 彙 編 21-24 J. N. I. Bakor, A History  
 of Geographical Discovery and Exploration. Lond.  
 1931. pp. 281-301 著者註。

ghar, hakt, gaini, wakh. ghar, jaghm. gor. 著「日」を  
 著 者 の 著 せ ぬ 語 彙 編 21-24 J. N. I. Bakor, A History  
 of Geographical Discovery and Exploration. Lond.  
 1931. pp. 281-301 著者註。

II. Sitzb. d. W. A. d. W. xvii. 1880. p. 737 著 者 註  
 中 中 西 語 語 彙 編 21-24 J. N. I. Bakor, A History  
 of Geographical Discovery and Exploration. Lond.  
 1931. pp. 281-301 著者註。

—177. F. v. Schwarz, Turkestan. Freiburg. 1900. pp.  
 438—441. A. Stein, Ancient Khotan I. pp. 25—26, 144  
 —146, Diko, Innermost Asia. II. p. 966 sq. W. R.  
 Riekners, The Duab of Turkestan. Cambridge. 1913  
 pp. 487—488. A. Schultze, Landes kundl. Forsch. im  
 Pamir. pp. 213—222. Encyclop. of Islam. 著 者 註  
 中 中 西 語 語 彙 編 21-24 J. N. I. Bakor, A History  
 of Geographical Discovery and Exploration. Lond.  
 1931. pp. 281-301 著者註。

モルゲンステイル氏「シムール方言の研究」

ユ ー ー ー 著 者 註  
 IV. pp. 209—210. Tomaselek. op. cit. 著 者 註  
 (4) R. B. Shaw. On the Ghaldah Langunges. J. A. S.  
 B. Vol. XLV. 1876. pp. 139—278. Vol. xvii. 1877. pp.  
 97—126

(5) W. Tomaselek. Centralasiatische Studien. II. Die  
 Paimr-Dialekte. Sitzsch. d. W. A. d. W. Vol. XXVI.  
 pp. 735—900.

(6) Diko, Yidghah, ein beachtenswerther ertanscher Dia-  
 lekt. Bezenbergers Beiträge z. Kunde d. indoger-  
 manischen Sprachen. Vol. vii. 1885 pp. 195—210(米 註)

(7) W. Geiger, Grundriss d. iranischen Philologie. I-2.  
 Strassburg. 1895—1901. pp. 289—313.

(8) W. Geiger, op. cit. pp. 287—344.

(9) A. F. F. Hornle, A Report on the British Collec-  
 tion of Antiquities from Central Asia. Part II. Calcu-  
 tta 1902. pp. 32—36. A. Stein, Ancient Khotan. I.  
 p. 145, 271.

(10) R. Gauthiot, Essai de Grammaire Sogdienne. Paris.  
 1914—1923. p. xi

(11) 著 者 註  
 Asia. II. pp. 888—889. 著 者 註

- (21) G. 氏の研究は Notes sur le Yazgoulnami dialecte iranien des confins du Pamir. (J. A. 1916. pp. 239—270) に同じ發音を採らなかつた。氏は顯著大體を受けず餘り圖に綴るべき語彙を採るのみで、その間の消滅した語彙は A. Meillet, Linguistique historique et linguistique generale. II. Paris, 1936. pp. 194—199 に載つてゐる。Zarubin 氏はその次に綴るに發音の所を有無で、裏面に同じ綴らなかつた。
- (22) Memoire de la Société de Linguistique Vol. XIX, pp. 133 sq. (未見)
- (23) A. Semenov, Materialy dlya izučeniya narečija gor-nix Tadžikov Tsentralnoi Azije. Moskva, 1900. Časti I. pp. 56
- (24) 未見。BSOS. Vol. VII. p. 704 參照。
- (25) 未見。BSOS. Vol. VI. pp. 736—9 參照。
- (26) Munjan の地名の他で綴るに「回」に The name Munjan and some other Names of Places and Peoples in the Hindu Kush (BSOS. Vol. VI. pp. 483—444) に一綴らなかつた。
- (27) 上記に關する詳細な書目など本書 p. xxiii—xxiv. 及び Geiger (Hirson, Leitz 著) に載つてゐる。
- (28) W. Jackson, Zoroaster. N. Y. 1912. Ditto, Zoroastrian Studies. N. Y. 1928. W. Tarn, Greeks in Bactria and India, Cambridge. 1938. pp. 114—115, etc.
- (29) 上記の中心に關する本地の語彙は、その av. Airyana vaējō, pehl. Eran-vez 果して Margart, Andrews 著の生語の原へ Xwarizm である (Eran-sahr, pp. 118, 155, Acta Orientalia, Vol. IV. p. 82 Note) Darmesteter 著の體に、原へ Eran-vaējan の Karabagh である (Le Zend-Avesta. Annales d. Musée Guimet. Tom. 22. p. 5, Note 4) へ、同語彙の語彙は、Zoroastrian である。Benveniste 氏はその綴の Vendidad 及び Yasht 中の、その綴の表の註を、その綴の Xwarizm である。Benveniste 氏は、その綴の Xwarizm 果して Eran-vaējan の本地であるか否かの真偽は別として、上記に關する編纂の原は、その綴の Eran-vez et l'origine légendaire des Iraniens. BSOS. Vol. VII. pp. 264—274)。
- (30) 上記に關する綴の原は、その綴の E. G. Browne, A Literary History of Persia. Vol. I. pp. 95—102; A. Christensen, L' Iran sous les Sassanides. Paris. 1936. pp. 157 sq. 509—512. 等に、その綴の K. F. Geldner, Awestaliteratur (Gr. d. Ir. Philologie. II. 1—74) 著參照。